



SSKP つくしんぼの 会報誌 つくつく通信 No.81

「つくしんぼ」はハンディのある子どもたちの放課後活動のスペースです

NPO 法人はらっぱ「フリースペースつくしんぼ」 東京都町田市小川 1511 TEL/FAX 042(796)8468

久しぶりの「つくしんぼ学習会」開催

5月13日(日)、所沢にお住まいの佐々木さんファミリーをお招きして『佐々木さんのお話を聴く会』がつくしんぼにて開かれました。

佐々木さんには現在36歳になる自閉症の息子さん(えいさん)がいらして、今のよういろいろなサービスが整っていなかった時代に、ご夫妻でさまざまな活動をされて、今息子さんは立派にお仕事をされていらっしゃるの、その中の経過のお話ですとか、お気づきになったお話を中心にお伺いしました。

【お母様のお話から】

進路決定まで

当時は、中学の特殊学級を卒業して社会に出すというのが当たり前だったんです。最後まで視野に置くのは働ける人になること、労働者になるということが最高の目標だと思っんです。

トイレ掃除、全ての掃除、体を鍛えるためのマラソン、3年生では職場実習もあるんです。しっかりすると職場につける、しっかりすれば会社員になれる、しっかりすれば社会人だよと、学校の先生が集中的に教えてくださったものですから、「僕もしっかりして働く」って自分から言ってくれたんです。

中卒で社会に出そうと決意した理由

15歳で社会に出すのは切ないこと。でも、だめなら次の年に高等部に行くこともできるし、なにより職場で育ててもらいやすい年齢であること。社会は大きい学校なんだ、養護教育、学校教育に特別にこだわらなくても、大きな学校なんだと思って出しました。

職場の様子

会社では、社会保険をつけてくれて、一カ月後には驚いたことに年金手帳をもらってきたんですね。「初めは何の仕事してた?」と問うと「本」と答えます。

本と言うとわからないでしょうけど、リフォームなんです。市場に出た雑誌や問題集のすれきれや汚れを、カバーを換えたり研磨機にかけたりするんですね。19年やっていたんです。時代が変わって本の仕事が



なくなって、クビになるのかな困ったなと思っていたら、ちゃんと次の仕事を作ってくれていて、流通業の、紅茶とかのピッキング作業とか、大きい箱を小分けしたり、お歳暮やお中元用のセット作りとかやって、ずっと続けて22年目になるんです。

22年間、会社に行きたくないって言った日は一度もありません。むこうもよくしてくださって、5年経ったとき、本社の人から電話がありまして「有給休暇をあげますよ」って。「毎年1日ずつ増やしていきますから」って。永年勤続、5年、10年、20年、そういうのは本社で受けて、それなりに対応していただいているので、嬉しいなと思って。後はいつまで働けるのかと思いませんけどね。

働く意欲を高め、育てるために

初給料日に所長さんから電話があって「喜んでくれなかったんですよ。」って。働くこととお金を得ることが結びついていなかった。所長さんが「おこづかい何に使うんだ」って聞いたら「僕わからない」って。「お母さん今までお小遣いもあげてなかったの」って訳で、弁当代に5000円、旅行用に5000円…お小遣いの袋も作りました。

働けばお金になる、そのお金で思ったものを買う、行きたい所に行く、そういうのが結びつく。そのうちに、西武園のプールに行こうと言うと「行かない、安いプール

がいい。」って。給料日前だから安いプールでいいって。儉約してるのがわかり感動ものでした。

働いてお金がいただけるっていうのはとても成長する。使う喜びを知ると働く喜びもわかる。喜びを知らなければ稼ぐ喜びにならない。それで労働に結びついて社会人としての自覚も持てる。時間がかかっても25歳でも30歳でもできます。

余暇活動の保証と仲間作り

会社でがんばれるのは、会社でない所が楽しいところじゃないといけない。家庭でも追い込まない、息抜きの場にしてあげる。もうひとつ仲間。これが大事なこと。

中学の特学の卒業生の仲間と中心になってくださった先生がいて、サークル活動を始めたり、青年学級あり、といった余暇活動、そういう楽しい集いの場があること、気の置けない仲間、そんなのを親と先生で作ってあげる。

自閉の子はお友達とのつながりがないように、現実はずごい仲間を意識していますよね。旅行、山登りに行くんだって、わたくしどもと行くときと仲間と行くときの準備の様が全然ちがいます。仲間というのは本当に大事。

健康な身体

職場に入ったら体が資本ですから、小さいときから丈夫な体をつくってあげる。会社でも作業所でも休まないということが大事なことなんです。

現在思うこと

自立が100%なんて大変なことです。洋服の前後ができていないか、トイレのこと、お風呂に入って100%洗えているか、食事のこと、いつも自立の中身を点検してあげる。究極的には親がいなくなっても全部一



人でどれくらいできるかを尺度にしていろいろ考えているんですね。

社会人として20歳以来一度も棄権したことのない選挙の投票や、不在者投票の経験。中学生のときの生徒会の選挙のことを覚えていて、体験て大事ですね。

一番嬉しかったのは、7、8年前に埼玉県としては初の就労支援センターが所沢にできたこと。障害者雇用の推進とジョブコーチ、職場開拓と、行政の支えがすごく嬉しいことですね。

親亡き後の準備

親亡き後はもう自覚しています。まだ若いのに酷だと主人は言いますが、そういうことの準備に入っているんですね。

特殊学級のときの先生が私財をはたきましてお家を提供してくださいまして、グループホームの前身のようなことを始めております。

【お父様のお話から】

息子が生まれた頃は、まだ自閉症の事が理解されていない混沌とした時代でした。

親として悩み、本を読んだり、親の会で役員をしたり、自閉症の人が多い入所施設で働いたりと積極的に活動してきました。

大事なことは

○政府に期待するのではなく、自分たちの手で行動して初めて言葉の要求ではなく、実体を持って政策に要求する。

○NPOのような親達の運動が根付いたこと。

○入所施設はまだまだ自由を許されない束縛した場所なので、もっと地域の中で人間らしい場所にしたい。

まずは親の覚悟が第一ですが、努力を怠ってはいけないということです。

【つくしんぼ保護者の感想】

「これから、子どもの成長とともに、親ももう少ししっかり考えていかなければいけないかなと思いつつも、親も楽しみを見つけて、しあわせであるという気持ちを大事にしながら生きていきたいなと、再確認させていただきました」

「今日は、ドクターの講演会では聞くことができないような、具体的な就職したお話とか、一番気になる親がいなくなったときのお話を聞いて、参考になりました」

「算数の計算はできるのに、実際のお金を使った買い物になると上手くできないことがあります。今のお話で、根気よく続ければ大丈夫なんだなと希望を頂きました」

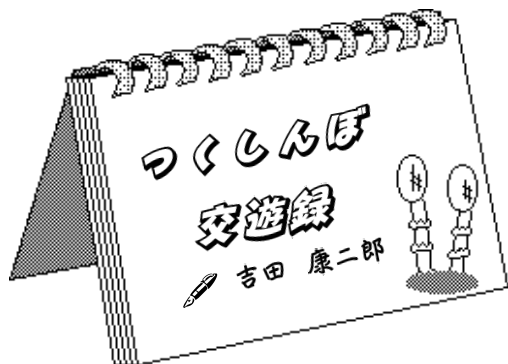
「待っているだけでなく、自分から勉強したり情報を集めなければと、強く思いました」

「ときどき、将来どういう風になっていくのかなと心配になることがあるのですが、今日は成人されてお仕事されている方とご家族の生の声を聞くことができ、頑張っている方もいらっしゃるんだなと勇気が出ました」

「苦勞なさったお母様方の話を聞くことができ、頑張ろうと思えました。これから少しずつ子どもと一緒に考え歩いていこうと思います」

遠くからわざわざいらしていただき、2時間近くもお話して下さった佐々木さんご夫妻。そして、我慢してつきあって下さったえいさん、本当にありがとうございました。





私は以前、町田市社会福祉協議会運営の学童保育クラブで働いていました。

でも、学生時代は「高齢者介護」や「成人障害者介護」を中心に学んだ為、正直、子どもとかかわる仕事など全く縁がないと思っていました。

そんな折、町田市社会福祉協議会から「障がいを持った子どもの面倒を君にみて欲しい」との打診。新しい仕事を探していたこともあり、受諾しました。これがきっかけで、私の「子どもと関わる仕事」がスタート。その経験を活かしたいと思い、現在に至っています。

私は日常、よく職員さんたちや子ども

たちに対し、ダジャレをしますが、決して無意識ではなく、職員さんたちに対し、仕事上、一瞬でも気の休まる時間を提供したい。子どもたちに対し、一番気の休まる場所であろう家庭と同じような雰囲気になりたいと思っているから。あえて、意識して口にしていきます。確かにダジャレはくだらない。でも、本当にくだらないと決めつけて良いのでしょうか？

私たちの仕事は、子どもたちと関わることです。その子どもたちの要求に小さい、大きいはあるけれど、くだらないことなんてあり得ない！ つまり、ダジャレのように、一見くだらないと思えることも、すぐにくだらないと決めつけない、そういう心構えが私たち、子どもと関わる人間には必要だと思います。

私が職員さんたちや保護者の方たちに「お前に子どもの何がわかる！」と言われてしまったらそれまでですが、今後も子どもたちが明るく、元気に、のびのびと過ごすことができるよう、2つの目でしっかりと見守っていきたいと思っています。



今回のキッズタイム
は、リョウくんです。
お母さんに聞きました

リョウは、特別支援教室の3年生。1年生の妹がいます。つくしんぼには2年生になってからほぼ毎日のように来ています。

他の子のやってる事などが気になるリョウは言葉より先に手が出てしまい、何かとトラブルの多い子でした。

つくしんぼに来るまでは、いつも家の中で妹と2人で遊んでいました。兄妹仲が良いのはいいことだけど、いつまでも2人だけの世界ではリョウにも妹にも良くないのでは…と思っている時に、つくしんぼのことを知りました。

つくしんぼに来るようになってからは、

おもいつきり体を動かして遊び、大好きな水鉄砲で全身ビッシヨリになっても怒る母親の私は居ない。パソコンでゲームが出来るようになり、造形の制作やお誕生会のケーキ作り、音楽の日には私も知らない楽器に触れたりと、リョウの世界が一気に広がりました。

最近は、リョウを連れて来ると妹も帰らずに夕方まで遊んで、みんなと一緒にちやっかりおやつまで食べて帰るのでちょっと困ってます。

何でも自分でやろうとしたり、何かをしてあげようとする気持ちが上手く言葉に出来なくて失敗することもあるけれど、これからもいろいろなことを経験して、リョウも妹も私も、みんなと一緒に成長していけたらと思っています。



 **つくしんぼ**
放課後 直撃インタビュー
～桜井紀世子さんの巻～

つくしんぼが補助金を貰って活動できるようになる以前から、子どもたちはもちろん、私たち保護者もずっとお世話になってきているパート職員の桜井さんにお話を伺ってみました。

——まず、つくしんぼとの出逢いについてお聞きします。

「ボランティア募集の貼り紙を見て、つくしんぼのバザーのカレー作りのお手伝いに参加したのがきっかけです。もう10年以上も前のことです」

つくしんぼにいらっしゃる前は、他の福祉施設や障がい者・児のグループでもお手伝いをしていたという桜井さん。作業所で作った品物を販売するお店でも働いていたことがあるそうです。

——障がいを持つ大人や子どもにかかわるようになって20年ぐらいになるそうですが、そもそものきっかけは何だったのでしょうか？

「自分の子育てが一段落して、今度は自分が元気なうちに他の人のお手伝いがしたいと思ったので。一番最初は近所のお子さんのお世話をしたり、ということから始めました」

桜井さんが、今つくしんぼで長くお仕事

をしていらっしゃるのは〈子どもたちと一緒に過ごしたい〉という思いがあるからだと思います。

「子どもたちには、大人とは違って進歩がある。今日できなくても明日できるかもしれないという楽しみがあります」

ついつい自分の子と他の子を比べ、できないことばかりが気になってしまう私ですが、この言葉を忘れないようにしたいと思います。

——ところで今までのつくしんぼで特に印象に残っている行事は何ですか？

「たくさんあって決められませんが、夏休みなどに親子でお出かけしたことはどれも印象に残っています。また、毎年パーベキューが楽しみです！」

——最後に、お母さんたちに何かアドバイスはありますか？

「私が、職員さんやお母さんたちに教えてもらうことが多く、家ででの生活とはまた違った楽しみがあります」

…と嬉しいお言葉を頂きました。桜井さん、素敵なお話をありがとうございました。

